

〔序〕

漢魏革命が『三国演義』にてどのように描かれているか、現存最古の版本である嘉靖本・李卓吾本・嘉靖本をそれぞれ確認して、検討結果をホームページに掲載した。日本における最初の翻訳である『通俗三国志』と、二十世紀において同書の受容を決定的なものとした『吉川三国志』を確認した。

今回は『吉川三国志』にならって、「随時、長所を擇つて、わたくし流に書いた」ということを自分なりに行ってみたい。吉川英治がそうであったように、『通俗三国志』や『三国演義』の諸版本に依拠するだけでなく、陳寿『三国志』と裴松之の注釈等も参照しながら、広義の「翻訳」ないしは翻案を行いたい。

漢魏革命の過程は、『三国志』巻二文帝紀注引『献帝伝』の「禅代衆事」に詳細に記録される。膨大な字数の史料であり、ちくま学芸文庫に収録された翻訳では、約四十頁にもわたる。漫然と通読すると、無内容の議論を、形式を整えるだけの膨らませたように見え、退屈である。だが精読すると、漢帝と魏王を筆頭とする関係者の思惑が日単位で変化し、相互に影響を与えながら、革命に関する合意形成がなされた過程が立ち現れる。

『三国演義』の物語性を借り、「禅代衆事」の迫力を描き出すことを目指したい。

「禅代衆事」のおもしろさは、字数の多さに反して、実施された期間が短いことにもある。一連の往復書簡は、延康元年の十月に、すっぽり収まってしまふ。たった一ヶ月のあいだに、四百余年の歴史を持つ漢家を終わらせ、かつ周宋革命まで千年に渡って参照された政治手続が創出されたことは、驚嘆に値する。『献帝伝』の記載が詳細なため、日付を刻みながら物語を進めることができる。日常の経験的な時間感覚に引きつけ、「禅代衆事」を追体験することができよう。本作は意識して日付を記入する。

〔一〕

曹丕は魏王となり、建安二十五年を延康元年と改めた。

夏四月、彼のもとに急報が入った。大將軍の夏侯惇が危篤だという。

「魏が揺らぐ」

曹丕は信じられず、「それは本当か」と使者に三度も聞き返した。

夏侯惇は、曹魏で第一の老臣である。今年の正月に父の曹操を失ったばかりの曹丕は、夏侯惇を父のように頼りにした。前月、前將軍から大將軍に昇進させた。南方の寿春に駐屯して、二十六軍を統括させている。^(一)

「動揺が見え過ぎます」

曹丕のわきから、そつと口を差し挟んだのは、司馬懿である。

「夏侯惇は、父にも等しい存在だ」

曹氏と夏侯氏は、相互に婚姻を重ねており、曹丕の祖父はもとは夏侯氏であったという話もある。

司馬懿は、曹丕と二人だけになってから言った。

「もしも大將軍が死ねば、孫呉への牽制が利きません。魏王がそれほど動揺されては、二十六軍もまた動揺し、寿春が孫呉の手にわたる危険すらあるのです。寿春を抜かれてしまえば、許島の漢帝を奪われるかも知れません。これは現実的な脅威です」

「私は、夏侯惇を父とも思っているのだ」

「そのお気持ちを利用するのです」

「どうということか」

曹丕は司馬懿に教えを請うた。

「大將軍が死んだら、過剰に悲みを表現し、礼制を逸脱するほどの葬儀を営むのです。少なくとも同姓の伯父として扱いましょう」

「私は真心から、夏侯惇の病を憂いているが」

「お気持ちは分かりますが、あなたは魏王です。軍事上の動揺を、伯父の死を悼む心によって覆い隠すのです。^(二) その間に次の手を打てば宜しい」

数日後、夏侯惇の訃報が届いた。

曹丕は素服をまとい、鄴城の東門に出て哀しみを表した。礼制に外れていると批判する者もあつたが、哭礼の真情に打たれて批判は収まった。泣き止んだ曹丕は、「大軍をひきいて南にゆく」と言い出した。

六月庚午（二十六日）、曹丕は三十万の軍勢を率いて、魏国を出発した。

「故郷の譙県にゆき、祖先を祭る」

(一) 曹操期に寿春で二十六軍を率いたが、その後、「督諸軍還寿春、徙屯召陵。文帝即王位、拜惇大將軍、数月薨（夏侯惇伝）」とあるように、召陵に移っている。寿春のほうが有名なので、単純化した。

(二) 裴注で孫盛が、曹丕の喪礼を批判する。『演義』らしくするために司馬懿に知恵を出させ、礼制の逸脱に意味を持たせた。

というのが、南進の名目であった。譙県は、曹氏の故郷であると同時に、夏侯氏の故郷でもあり、先祖の宗廟がある。

「三十万もの動員は、国費を消耗するだけです」

と進言した者が、曹丕の不興を買って、死罪となった。

「魏王となったことを、故郷の人々に誇示したいのでしよう。しかし、わが国にはそのような戯れをする余裕はありません」

曹丕の胸中を勘ぐって批判した者も、死罪となった。

「父（曹操）が死に、魏王に即き、伯父（夏侯惇）が死んだというのに、私は一度も帰郷していない。祖先に申し訳が立たない」

小さな声で、しかし郡臣に聞こえるように、曹丕はつぶやいた。

出兵の目的は、夏侯惇なき後の孫呉への牽制である。三十万を動員するのだから、単なる祭祀や「故郷に錦を飾る」ことが用件のはずがなかった。

司馬懿が曹丕に擦りよった。

「反対した二名を殺したことで、魏王の器量を疑う声が出ています。忠臣の諫言を聞くことのできぬ、暗君ではないかと」

「殺したのは失敗か」

不安そうな顔をした。魏王としての経験は、まだ半年である。

「いいえ、殺すべきでした。魏王は伯父の死に触れ、故郷の宗廟に詣でる。魏王となった榮譽を祖先に報告する。これが公式見解です。反対する二名が死んでくれたことで、この名目に説得力が増しました。孫権が情勢の判断に迷うでしょう」

「しかし、暗君という評判が立ってしまった」

「父王（曹操）ですら、孫呉を制することが出来ませんでした。もしも魏王が孫呉を制圧すれば、後から、いかようにも名誉を回復することができます」

秋七月甲午（二十日）、魏軍は豫州の沛郡、譙県に到達した。

現地の父老・百姓が、酒を持って詰めかけ、曹丕の魏王即位を祝福した。譙県の東郊で盛大な宴席が催され、それは終日続いた。

伎楽や百戯を演じさせ、気分の良くなった曹丕は、

「これから二年間、租税を免除しよう」と父老に約束した。

「少しは慎まれたほうが」

散会したのち、司馬懿は曹丕の袖をひっぱった。

（一） 正史にも『三国演義』にない解釈。作者の推測です。

「漢高帝は、皇帝に即位した後、帰郷して租税を免除した。霸王は、故郷の租税を免除する。これは故事であろう」

「まさか、そのような発言を、宴席でしたのですか」

「よく覚えていない」

曹丕は高らかに笑った。

司馬懿が見たところ、曹丕は心労を晴らすため、酒を過ぎたようだ。王位にあることの重圧など、司馬懿に知るよしもない。

「あなたは、漢の臣下、漢の魏王です。言うまでもありませんが、漢高帝とは違います。霸王でもありません。父王の遺業を継承しただけで、まだ何もなさっていない」

「分かっている」

曹丕は濁った目で、司馬懿をにらんだ。

「故事だから正しいなどと、適当なことを言っすまなかつた。お前には本当のことを言おう。私が租税を免除したのは、恩恵を施すためだ。人と人との関係においては、先に施した者のほうが優位に立てる」

「どういう話ですか」

司馬懿が首をかしげた。

曹丕は得意そうに喋った。

「よく聴いてほしい。施しを受けた者は、財物を受け取るのだから、一見すると利益を得たように見える。だが、大勢の前で公然となされた贈り物は、それほど単純ではない。皆は思うだろう。租税を免除した魏王には、度量がある。そして、免除された父老たちは、魏王に対して借りができ、お返し義務を負ったのだと」

「負債と、返済の義務ですか」

「父老は私に頭があがらないだろう。私が魏王だからではない。私から財物を受けとったからだ」

「そこまでお考えでしたか」

「確たることは言えないが、そんなものではないかな」

曹丕は気持ちよさげに、軍営内の寝所に消えた。

次の日も祝宴は設けられた。父老たちは、酒だけでなく、肉を持参した。

「魏王に対する、ほんの気持ちです」

曹丕は、ありがとう、と鷹揚に受けとってから、

(一) 司馬懿が出てくると、王位・帝位を匂わせる伏線を張りたくなる。

(二) 司馬懿が出てくると、首を回したくなる。

「しかし私たちは、同郷人ではないか。気づかいは無用だ。私は幼少の頃から戦地をまわり、故郷で過ごした時期が短かった。あなたたちと酒を飲み、親交を結べるのが嬉しいのだ」

と言つて、鄴県から輸送した財物を、父老たちに分け与えた。父老たちは恐縮してから、言葉を尽くして曹丕を称賛した。

「魏王、万歳。王の恩沢は、計り知れないものです。しかし——」

「しかし、何だ」

「私たちは、受け取つてばかりではられません」

「よい。諸君からの返礼を、私は嬉しく受け取ろう。しかし後日、更なる贈り物を与えるであろう。財物を贈りあった回数、その価値の大きさによって、私たちの関係は揺るぎないものになっていく。そうであろう、あつはっは」

気分の良くなった曹丕は、惜しまずに彼の考えを口に出した。突如として、陣の外が少し騒がしくなった。

「何ごとか」

曹丕が報告を求めると、

「蜀将の孟達が、魏王に帰服したいとの使者を寄越しました^(二)という。」

「魏王の恩徳は、劉備の配下にも及んだ」

郡臣や父老から歓声があがり、万歳が叫ばれた。

「慶事である」

曹丕は誇らしげに、それに応えた。

酒杯が三巡したころ、また陣の外が騒がしくなった。

「何ごとか」

曹丕が報告を求めると、

「孫権が珍宝が献上して来ました^(三)という。」

「魏王の恩徳は、ついに孫権にも及んだ」

郡臣や父老から雀躍して、万歳が叫ばれた。ところが曹丕は、

「しまった」

と叫ぶや、口から酒や肉を吐き出すと、その場に昏倒してしまった。司馬懿が駆けより、

(一) 『演義』では、劉封と孟達の対立を先に描き、「孟達の投降↓曹丕が鄴県を出発」という順序だが、文帝紀では逆である。文帝紀に従う。

(二) 文帝紀では、譙県に到着する前に孫権が「奉獻」する。『演義』にはない。

曹丕を幕舎まで運んだ。魏王の身に、何が起きたのか。次回へ続く。

〔二〕

水を飲ませると、曹丕は落ち着いた。

「いかなさいました」

司馬懿は袖をつかって、曹丕の口の周りをぬぐった。

「孫権が贈り物をよこした」

「魏王の威令が届いたのです。良いことはありませんか」

「仲達よ」

曹丕は、司馬懿をあざなで呼び、考えを語った。

「今回の南進の目的は、孫呉の制圧であった。宗廟の祭祀だとか、郷里での饗宴だとか、これらは目眩ました。とぼけたふりをして大軍を移動させ、孫呉を攻める。あわよくば孫権を、私の目の前に引きずり出したかった」

「心得ております」

「だが孫権は、先に私に贈り物をした。譙県の父老は、皆がこれを見た。もし受けとらねば、私は狭量を笑われるだろう。受けとってしまえば、私は孫権に対して借りができる。借りのある相手を攻めたのならば、天下は私の不義をそしるだろう」

曹丕が咳きこんだので、司馬懿はさらに水を飲ませた。

「どうすべきとお考えですか」

曹丕は苦しそうに水を飲んだ。

「私に残された方法は、ただ一つである。さらなる財物を贈って、孫権の威信をくじくことだ。しかし孫権は、南海に交易の経路を持っている。珍奇なものを、次々と送ってくるだろう。私はさらに珍奇なものを送って、対抗しなければならない。そういう、際限のない戦いに持ち込まれてしまった」

「考え過ぎではありませんか」

「違う。父王（曹操）が孫権を攻めあぐねた理由は、ここにあったのだ。決戦が迫るたび、孫権がへりくだった。贈り物を差し出した者を、討つことはできない。貸借による結びつきがすでに生まれたからだ。自分が魏王になって初めて、それが分かった」

曹丕は膝をついた。

「私の三十万の魏軍は、けちな贈り物によって、足止めされた」

地面をこぶしで叩き、腹のなかのものを全て吐いた。

「父王は孫権の策略にかかり、決戦の機会を失った。父王が死んだとき、魏国と孫権との関係は、いちど解消された。私がすべきことは、孫権が関係を取り結んでくる前に、迅速

にやつを討つことだった。贈与の使者が来ても、気づかぬふりをして踏みつぶせるほど、圧倒的な進軍を――」

司馬懿が、曹丕を助け起こした。

「やはり考えすぎだと思えます」

「天下の統一は、私の代では成らないかも知れない」

「まさか、そんなこと」

曹丕はまだ三十四歳であり、司馬懿より八つも若い。ましてや即位して、まだ半年しか経たない。赤壁のような敗戦の後ならまだしも、宴席に孫権の使者が現れただけで、どうしてここまで絶望するのか。司馬懿には、理解しかねた。

「ああ、父王に申し訳が立たない」

その日、曹丕は宴席に戻ることはなかった。

翌日、丙申（二十二日）から、曹丕は譙陵にこもって、祖先に祈り続けた。侍臣を誰も近づけることなく、血縁者すら近づけることなく、祈り続けた。

曹丕が氣力を失ってから、譙県の郊外に宴席は設けられず、かといって、魏軍をどこかに動かすわけでもなかった。大軍は駐留するだけでも、莫大な消費を行う。

「このままでは困る」

魏の高官は額を突きあわせて話したが、良い意見が出ない。

会議に混じりながら、司馬懿は焦った。

――太子のころから仕える私ですら、魏王の心情を理解できない。説得により、事態を打開できる者は、一人もいないだろう。

会議を重ねる間にも、確実に国庫は減ってゆく。

「いつそのこと心変わりして、孫権を攻めてくれたら」

と、依然として思う。鄴県を進発したとき、無用な動員だと批判されたが、期せずしてその通りになっている。

「孫権を挑発してみようか。いや、孫権は応じまい」

司馬懿は頭を抱えた。

孫権の献上に対して、曹丕はそれを遥かに上回る財物を届けた。すると孫権は心得たもので、前回よりも盛大な財物をよこした。これが三たび往復した。孫権の使者が到着するたび、曹丕は苦しんだ。今回の出征に伴った財物では足りず、本拠地の鄴県の宝物庫を開いて、それを孫権に届けるように命じるほどだった。

（二）曹丕の絶望は創作なので、安易に司馬懿が共感させなかった。父老への贈与を、孫権の使者への絶望の伏線とした。この絶望が、次の漢魏革命への伏線になる。本作の主題。

八月に入って、高官の一人、相国の華歆が曹丕に報告した。

「石邑県に、鳳凰が飛来したそうです」^(一)

「そうか」

相変わらず生氣のない曹丕であるが、華歆は、主君の顔色が少しだけ明るくなったのを見逃さなかった。

華歆はひそかに命じて、郡国のめでたい話を収集した。

「臨菑県で、麒麟を捕獲した」^(二)

「鄒県で、黄龍が出現した」^(三)

「饒安県で、白雉が出現した」^(四)

畳みかけるように、一日おきに報告した。

「どういう意味があるのだろうか」

曹丕が関心を示した。

華歆は、太史丞の許芝を伴って説明させた。

「麒麟の捕獲は正しい君主が、いまだ立たぬことを意味します。黄龍は、火徳をもつ漢家の皇帝が衰えて、新しい土徳の皇帝が立つことを意味します。白雉は、幼弱な君主に代わって、宰相が次の君位を占めることを意味します」^(五)

「なんだ。吉祥かと思つたが、凶兆ばかりではないか」

曹丕が肩を落とした。

——魏王は、漢家から魏家への革命を望んでいないのか。

華歆は誤解したか、と反省した。

曹丕は、鳳凰の報告を歓迎した。新たな皇帝の出現を予感したはずだ。皇帝になるべき人物など、魏王の他にはいない。古典に精通した彼のことだから、そこまで連想した上で、顔色を取り戻したのではなかったか。もしくは、孫権を圧倒するため、新皇帝になろうと考えたのではなかったか。孫権は、最晩年の曹操に、「あなたが皇帝になるなら、臣従する準備がある」と言った。曹丕の代替わりした現在も、同じであろう。

——魏王は気の迷いから、前途を見失っているだけだ。

(一) 八月の鳳凰は、文帝紀と『演義』に共通。

(二) 「獲麟」は、『春秋』の最後の一節。まだ聖君が現れないから、麒麟が捕らえられた、という孔子の主張（であると、漢代に認識された）。『演義』は麒麟の出現を伝えるだけで、捕獲に成功するのは、『吉川三国志』だけである。文帝紀では麒麟は現れない。

(三) 『演義』で黄龍は、ここに現れる。文帝紀では、同年三月である。

(四) 『演義』では白雉は現れない。文帝紀では、同年四月のこと。

(五) 周公旦の故事であり、王莽の故事でもある。

華歆は思考を巡らせ、革命の推進を決断した。

実権のない漢帝を廃し、魏王を皇帝に即位させた上で、残敵を掃討すべきである。実権と名目とが乖離していると、体制に破綻が生じる危険があるからだ。曹丕の衰弱に付けこみ、計画を進めてしまおう。

ところで、と言って話題を変える振りをしながら、

「魏王は、郷里の父老に恩徳を施されました」

と華歆が切り出した。

「そうだ」

「王爵を受けたことへの謝礼は、十分に果たされましたか」

「そう思っているが」

「いいえ、返礼すべき相手が残っています」

華歆は沈黙した。長い沈黙ののち、

「漢帝か」

と曹丕が言った。

そうです、と即座に同意して、華歆が早口で説得した。

「殿下を魏王に封じたのは、漢帝です。漢帝のおわす許県は、ここから近い。漢帝に、私たち『漢の魏軍』の偉容をお見せするとともに、漢帝には十分な財物を贈り、漢の郡臣たちを酒宴に招きましよう」

「よろしい」

十月の癸卯（一日）、魏軍の三十万は、譙県の陣營を払った。

十月の丙午（四日）、潁川の潁陰県にある曲蠡(二)に到着した。許県の真南である。空気が澄んだ冬晴れの日には、許県の城壁を望むことができる場所である。

着陣するや否や、華歆が文書を提出した。

「左中郎将の李伏から、上書を預かりました」(三)

「読み上げろ」

予期せぬ報告に、曹丕は、何ごとかと怪しんだ。

「李伏曰く。孔子の著作に、次のような文句があります。『天下を定むる者は、魏公の子桓なり』と。聖人は、魏王の天下を予知しておりました」

(一) 正史では、夏侯惇の死↓鄴を出発↓故郷で酒宴↓許県に接近↓禪代衆事↓受禪。『演義』は、鄴を出発↓故郷で酒宴↓夏侯惇の死↓（夏侯惇を見舞うため）鄴に帰還↓禪代衆事↓許県に接近↓受禪。ここは正史に従う。

(二) 李伏の上書は『献帝伝』にあるが、華歆の関与は創作。

曹丕はあざなを子桓といい、予言に一致する。曹丕は、

「太古の孔子が、私の名を知ると言うのか」

と呆れて、苦笑した。

華歆は、このようにも書いてあります、と前置きして、李伏の上書の後半を読んだ。

「この予言を、初めは伝え聞くだけでしたが、遠国から取り寄せた書物にも、同じ言葉がありました。私は先王（曹操）に伝えましたが、先王の代で天下が定まらぬという予言は不吉ですから、報告を見合わせました。今王（曹丕）が即位した後も、へつらいだと思なされることを恐れ、公表を見送りました。しかし今日、魏の大軍が許都に接近するのを見て、予言が真実だと確信したため、ご報告します」

ばちんと上書を閉じた。

「魏王、お分かりでしょうか」

「分かるも分からぬもない。偽書だ、偽作したものだ。遠国の文書が一致したとか、長く秘密にしたとか、信憑性の演出に懲りすぎている。典型的なへつらいではないか」

淡々と、不快を表明した。

「大軍の接近を見て――、と上書にあるが、これでは私が漢帝を脅したかのようなうだ。華歆はこの話を聞かせるために、私をだまし、許都の南郊まで魏軍を移動させたのか。この話はしたくない」

曹丕が背を向けると、

「愚かです」

と華歆が一喝した。

「誰が愚かだ」

振り返って目を剥いた。曹丕の手が、劍の柄に向かって動いた。

華歆は動ぜず、若い君主を見下すように高笑いをした。

「天命の現れ、聖人の遺思を、魏王は疑うのですか。これを愚かと言わずして、他に何を愚かと言うのでしょうか」

「何だと」

曹丕が劍を抜いた。華歆は斬られてしまうのか。次回へ続く。

(一) 文帝紀注引『献帝伝』 李伏の上書を改変した。『演義』は、李伏の名は出てくるが、もっとも大切な「孔子の玉版」を出さない。漢魏革命にいたる過程（「禅代衆事」という）は、李伏が孔子の玉版を報告したところから始まる。文帝紀の本文は、曹丕が曲蠡にきた直後、禅譲の詔冊（「禅詔」という）が出たように見え、宮城谷昌光『三国志』では、そのように記す。だが禅詔が発せられるのは、もっと後である。『演義』は、漢帝を脅迫して禅詔を出させる過程を描いており、内容は異なれど、順序は正史に近い。

〔三〕

司馬懿が駆けよって、曹丕の手許を抑えた。

「いけません」

「手を放せ、お前も死にたいか」

曹丕は激昂した。

「偉大な父を嗣ぎ、なんの功績もない私が、天下を定めるだと。言葉では私を尊びながら、じつは侮辱しているのだろう。華歆だけではない。司馬懿も同じ考えか」

曹丕が切実に向き合っている相手は、揚州の孫権ではなく、益州の劉備でもなく、ましてや四百余年の歴史をもつ漢家であるはずがなく、父の曹操であった。

司馬懿が唇を震わせた。

「お見苦しいです……どうか……」

「斬りはせぬが」

辛うじて曹丕は、剣を納めた。

華歆に近づき、荒々しく文書を取りあげた。

「李伏の上書を、内外に示せ。軍中の魏臣にも、許都の漢臣にもだ。予言の真偽は、みな良心に判断させよう。私は徳の薄い人間である。仮に文書が本物で、孔子が『子桓』の天下を予知したのであっても、私のことではない^(二)」

と命じた。

華歆は首をかしげ、

「しかし、鳳凰、麒麟、黄龍、白雉が、意味もなく現れるとは思えません。百歩譲って、李伏の文書が偽作であっても、これらの現象には説明が付きません」

と念を押した。

「もしも本当に鳳凰が舞い降りたなら、それは先王たる曹操の至徳に応じて、やってきたのだろう。麒麟、黄龍、白雉、どれもそうだ。私のために現れたのではない^(三)。曹操には、皇帝となる天命があつたかも知れないが、曹操は死んだ。天命の話は終わりだ」

なりふり構わず父を呼び捨て、さらに訴えた。

「鳳凰などの瑞祥は、人間の力で操作できるものではない。曹操に徳があれば、遅れてでも到来する。私がそれを禁じることができない。人間には瑞祥を操ることができないが、裏を返せば、人間が瑞祥に操られる必要もない」

(一) 『献帝伝』で曹丕が李伏に断った王令より。

(二) 『献帝伝』で曹丕が李伏に断った王令より。後半のセリフは創作。

いつの間にか、目に涙が浮かんでいた。彼もまた、天を畏怖している。瑞祥を頭ごなしに否定するのは恐ろしいのである。

「魏王は天の意向を、無視なさるのですか」

華歆が詰め寄った。

「それぐらいに、しなさい」

華歆の肩に、御史大夫の王朗が手をかけた。ともに魏国の三公を務めており、その学識ゆえに、威信においては王朗のほうが勝る。

王朗が言った。

「私は鳳凰を信じません。瑞祥と人事は、切り離して考えるべきです。魏王と同じ意見です。神秘的な現象が、どんな意味を持つのですか」

曹丕が救われたような顔をした。

「王朗先生、あなたの意見をもっと聞きたい」

「若い魏王よ。合理的な判断に基づいて、振る舞いなさい。孔子の予言を落ち着いて読めば、あなたが天下を定める、とだけ書いてある。『魏の皇帝』ではなく、『漢の魏王』として臣節を尽くし、漢のために天下を平らげる。そう読めば良いのです。これは漢臣の筆頭である魏王への激励、祝福なのです。挑発に乗ってはいけません」

碩学の老臣に仲裁され、曹丕は沈静した。曲蠡で新たに設営した本陣に、司馬懿を伴って帰っていった。

曹丕がいなくなった席で、

「王朗どの、邪魔をしないで頂きたい」

と、華歆が不満をもらした。

「漢帝に力はなく、魏王に力がある。今日の不均衡が長びくのは、良くないことだと思えます。押し切っても魏王を皇帝に戴き、体制を立て直すべきです」

王朗は、まあ待て、となだめ、

「漢帝の無力は、公然の事実。私もいずれ、魏王に帝位を勧めようと思う。しかし、魏王は即位したばかりだ。実績のない今、無理に皇帝に押し上げれば、天下の反発が大きい。昨年、関羽の暴威は去ったが、孫権も劉備も健在なのだ。まして華歆どのの方法では、魏王の反感を買うだろう」

と自説を聞かせた。

華歆は首を横に振った。

「皇帝に立てた功績は何よりも大きく、すべての過失を帳消しにします。強引と言われよ

(一) 王朗の子である王肅の「理」の儒学を意識して書いた。『演義』でも正史でも、王朗は名を連ねるだけで、独自の役割を持たない。

うが、私は私の方法でやります。むしろ、魏王に実績がなく、立場も心情も不安定な今だからこそ、策立のありがたみが増します。感謝こそされど、反感など受けない」

「きみが斬られるのは自由だが、魏国を危うくする政略は辞めろ」

王朗は、わざとらしく溜め息をついて退出した。

残された華歆は独言した。

「王朝が移り変わるとき、奪う者と奪われる者がいる。魏王に奪う気がなくても、まだ方法があるのだ」

十月の丁未（五日）、華歆はひそかに、尚書の衛覬を招き寄せた。

「きみは、かつて漢臣だったな」

「はい」

衛覬に限らず、曹操が魏王府を開設するまで、天下には漢臣しかいなかった。華歆だって例外ではない。自明のことを確認されたため、衛覬は文脈を読みかねた。

「で、いまは魏臣となっている」

「そうですか」

華歆が意味ありげに微笑したので、いよいよ衛覬は当惑した。

「もう一度、漢臣に戻る気はないか」

華歆が耳元でささやいた。

「お気に召さぬことがあれば、謝罪いたします」

衛覬はひれ伏した。目の前にいる華歆は、漢家を滅ぼして、魏家に帝位を移そうとしている人物である。昨日の口論の場に居合わせた、それを知っている。その華歆が漢臣に戻れと言うのなら、左遷の指示に違いない。

「どうして謝るのだ」

「何とぞ、お許しを」

身に覚えのないことだが、衛覬は保身を願った。

「いやいや、顔を上げなさい。私はきみに、魏臣として最高の功績を、漢臣として立ててもらおうと思う。きみを評価しているから、これを頼むのだ」

「どういうことでしょうか」

「いちど漢臣にもどって侍郎となり、漢帝の信頼を得なさい。私はこれから、漢帝に退位を迫る。きみは漢帝の動きを見張って、逐一の報告をしてほしい。あり得ないと思うが、魏王を討伐せよ、などという密勅などを発せたら、天下が混乱する。孫権や劉備に、隙を与えることになる。それだけは防がねばならない」

華歆は親しげに、衛覬の腕を触った。

「漢帝は三十余年も帝位にあり、何もさせてもらえず、飼い慣らされた。とうに精神が衰

えているはずだが、董承の前例もある。警戒を怠りたくない」

華歆が持ち出したのは、建安五年、漢帝が曹操の殺害を命じた事件である。幼少期は聡明とされた漢帝であるが、前回の事件から、すでに二十年以上が経過した。鬪志を残しているとは思われない。

「精勤いたします」

三公の指示を断れるはずもなかった。

つぎに華歆は、自分に近い魏臣を集めた。

侍中の劉廙、辛毗、劉曄、尚書令の桓階、尚書の陳矯、陳羣、給事黄門侍郎の王毖、董遇といった官僚が詰めかけた。

「今から許都の宮殿にゆき、漢帝に上奏する」

華歆があごで合図すると、桓階が懐から文書を出した。

「上奏文はここに」

「こいつを漢帝に突きつけるぞ」

華歆らは曲蠡の魏軍の陣営を出て、真北に向かった。

魏軍の陣から、兵士ではなく文官が行列をなして出てきたので、衆人は不思議そうに見つめた。華歆は馬車に乗り、周囲に文官が付き従う。許県の衛兵には、あらかじめ話を付けてあった。華歆が木札を出すと、静かに城門が開いた。

——この開門が、事実上の漢家の落城である。

と華歆は勇躍したが、左右の者に話すのは、さすがに憚った。

許都の朝廷に入った。

「皇帝陛下に上奏いたします」

漢帝は階上におり、暗がりで見えない。

華歆は上奏文をかかげ、高らかに読み上げた。

「先日、左中郎将の李伏が、孔子の著作を献上しました。『天下を定むる者は、魏公の子桓なり』とあります。魏王の恩徳は四方・万物に行きわたり、古今に前例がないほどです。鳳凰や黄龍を見て、郡臣は、漢家の命運が尽き、魏家の命運が興るだろうと議論しています。陛下は堯舜に則り、天下を魏王に譲りなさい」

献帝は、まだ三十九歳である。老いの年齢ではない。これまでに、董卓、李傕、曹操と

(一) 華歆が献帝に迫るのは『演義』。正史では、華歆と献帝の接触の記録はない。

(二) この上奏は、『献帝伝』の李伏の次に載録される、劉廙や辛毗らの上言と、『演義』の華歆による上奏を合わせたもの。孔子の著作（玉版）は、『献帝伝』において重要なので、『演義』にはないが追加した。

(三) 年齢を注記して、献帝の描写を丁寧に行うのは、『吉川三国志』。

いった権臣によって、ときには干戈の暴力で、ときには無言の威圧で、数え切れないほどの脅迫に晒されてきた。それでも心身を維持し、今日も帝位に座っている。このこと自体が、漢帝の強さを証明している。

法外な上奏を、漢帝が直ちに受諾するはずがない。

しばらくの沈黙があった。

この時間を、華歆は凄まじく長く感じた。魏臣たちは、膠着に堪えきれず、礼法を破って顔を上げ、目を細めるなどして、漢帝がいる階上の暗がりを見つめた。

「朕の――」

漢帝が重い口を開いた。その返答はいかに。次回に続く。

〔四〕

漢帝が声を発した。

華歆は祈るような気持ちで拳を握った。乱世を生き抜いた自負があるが、経験の質と量、とくに苛酷さにおいて、漢帝には劣るであろう。許都に来るまで、どこかに漢帝を侮る心があつたが、正対して初めて、恐ろしいとさえ思う。

「朕の――」

ひと呼吸を置いて、ゆっくりと優しく漢帝が話す。

「朕の高祖は、三尺の剣を帯びて秦楚を滅ぼし、漢家の天下を創立した。劉氏はそれから四百余年、血統に従って天命を伝えてきた。私は才覚に乏しいかも知れないが、漢家の天命を傷つけるような悪政を行ったつもりはない。祖先から伝えられた天命を、朕の代で捨てようとは思わない。」

「あ、が、が」

華歆は気圧されて意識を失い、上体を仰け反らせて倒れた。すぐ後ろいた桓階が抱きとめたので、床に頭を強打することは避けられた。

華歆が、ぜえぜえと悶えた。

皇帝に退位を迫る者など、長い歴史の中でも稀少である。これを挑んだ者は、ほぼ全員が史書で批難された。

華歆は、彼なりの成算があつて本日の上奏に臨んだのであるが、文書を読みながら後悔の念に襲われ、漢帝の返答を待つとき、生きた心地がしなかった。漢帝に拒絶されるに及んで、崩れ落ちたのである。

（二） 漢帝の台詞は正史にないため、『演義』より。正史では、いきなり禪詔が掲載され、その過程の漢帝の言葉はない。史料の性質による制約であろう。

桓階は華歆を床に寝かせ、反論を試みた。すでに奥歯が震えているが。

「陛下は、あ、あく、悪政はないと仰いましたが、果たしてそうですか。桓帝と靈帝の末期より、二十余年もの戦乱が続いたことは、漢家の衰退そのものです。しかし天は漢家を憐れみ、曹氏を遣わして陛下を保護しました^(二)」

「いかにも、曹氏の功績は大きい。だから魏王に封じた。戦乱の責任は劉氏にあるが、それが収束した今日となつては、曹氏を顕彰することで報いたいと思つている」

漢帝の論理は破綻がない。

桓階は汗を流し、話題を変えた。

「陛下、こう、黄龍の意味する所が分かりませんか。黄龍そのものが、明確な言葉を発するわけではありません。しかし、示唆するところは明らかです^(三)」

「きみの話は、劉氏のみならず、天下にとつての重要事である。朕の憶測で、誤解をしたくない。黄龍の意味というのを、隠すことなく伝えてほしい」

「そ、それは……」

桓階は言い淀んだ。

彼自身が言つたとおり、黄龍の出現は、特異な現象には違いないが、その意味は各人の解釈によって異なる。

——察せよ、

と強調しても、話は進まないだろう。

桓階は、漢家の主君、すなわち天命を失つたはずの本人に向けて、

「漢家の赤徳が終わり、魏家の黄徳が始まる」

などという借り物の主張をする度胸はなかった。それが唯一の解釈である、という保証もない。

余りにも長く無言が続いたので、漢帝が、

「本日はご苦労であった。よく議論を尽くすように」

と命じて、朝廷から立ち去つた。

桓階は腰を抜かして、動けなかった。郡臣たちは、華歆と桓階を担いで馬車に乗せ、許都の南門から、逃げるように退出した。

(一) 『献帝伝』の劉虞や辛毗らの上言の後半に基づいて、桓階の言葉をつくる。

(二) 『演義』はここで凶讖の話に飛躍するが、『献帝伝』は漢室の治世を批判するので採用した。ただし原典は曹丕を勧進する上奏であり、漢帝に向けたものではない。

(三) この詭弁も『献帝伝』に載録されており、曹丕に「似て非なるものがある。誤解じゃないのか」と反論される。

十月の辛亥（七日）、華歆は、太子丞の許芝を伴って、漢帝に拝謁した。

「上奏がございます」

「天命の件、議論を尽くしてくれたか」

「こちらの許芝より申し上げます」

華歆に促され、許芝が文書を読み始めた。

『易伝』には、戊もしくは己の日に黄龍が現れたとき、聖人が天命を受けて王者になると記されています。先日の黄龍は、戊寅の日に現れました。これは魏王が皇帝になることを意味しています」

桓階が答えられなかった黄龍の意味を説明した。

「戊もしくは己の日は、五日に一回ずつ巡ってくる。これだけを根拠に退位せよと言われても、朕は応じられない」

「陛下、お聞き下さい。『易伝』には、戊もしくは己に麒麟が現れると、聖人が王者になるとも記されています。麒麟の出現も、これに当てはまります」

「ただの繰り返し過ぎない」

「しかのみならず——」

負けまいとして許芝が身振りをつけ、主張を展開した。

「白馬令の李雲の上書に、『当塗高なる者は、まさに許に昌さかなるべし』とあります。当塗高とは魏のことです。許都で魏が興隆する証です」

当塗高の文字を恣意的に解釈して、『魏』にこじつけた。

漢帝は段を降りて、許芝の前に腰を下ろした。

「当塗高は、朕の世祖（光武帝、劉秀）が、政敵の公孫述を論難するときを持ち出した予言だ。わざと意味をなさぬよう、無作為に文字を並べた言葉だと、父祖から聞いている。それに、『当塗高は自分のこと』と主張したのは、袁術ではなかったか。世祖の言葉をこれ以上、曲解して侮辱してほしくない」

漢帝が背を向けた。

「まだあります」

と許芝が胆力を振り絞った。

『孝経中黄讖』は、『日が東にゆき、火を絶やす。一いっにせせれば聖なり』とあります。東と日で『曹』、一と不で『丕』となつて、魏王の姓と諱です。魏王が火徳の漢家を絶やし、聖なる君主となるという予言です。『易運期讖』は、『鬼と禾と女が連なり、天下の王になる』とあります。鬼と禾と女とは『魏』に相違ありません」

漢帝は、見せてみよ、と許芝から書翰を取りあげた。

「これらの書物の出典は、どこかな。聞いたことがない書名ばかりだ。まさか自分で書いたのではあるまいな」

漢帝が、許芝の瞳を覗きこんだ。

許芝の鼻の穴から、生暖かい血が落ちて、床に跳ねた。口許をぬぐうと、恐れながら申し上げますけれども、と絶叫した。

「漢の高祖、漢の世祖とも、神秘的な文言を使って、王朝を正統化しているではありませんか。なぜ劉氏には独占的に讖緯が許され、曹氏には許されないのですか⁽¹⁾」

華歆が止めに入ったが、最後まで言ってしまった。

「朕はそれに答えねばならぬか」

漢帝は左右を見渡した。発言する者は、一人もいない。

「祖先を敬うことが朕の信念である。高祖と世祖は、代々の劉氏が、天とともに合祀してきた祖先だ。許芝は、天の意向を察せよと強調しながら、朕の天に、劉氏の天に、難癖をつけた。容認できることではない」

漢帝の額に血管が浮いた。

「劉氏は微弱であるが、ここは許都の朝廷であり、道義を誤った文官の一名を斬るだけの兵力はある。一連の退位の上奏を、魏王がどう考えているのか知らないが、祖先を侮辱した者を朕の命令において罰し、後から魏王から報復されても、本望だと思っている。九泉の下で、祖先は朕を歓迎するだろう」

漢帝の目が潤み、きらりと室内の灯火に反射した。

許芝の処置はいかに。次回に続く。

〔五〕

許芝は、不安そうに華歆のほうを向いた。華歆は目を伏せた。

ここで許芝が、

「私は華歆どのが用意した結論を前提に、議論を構築しただけです」

と暴露してしまえば、命だけは助かったかも知れない。だが許芝は、そのような生き様を選ばなかった。許芝は堂々と、漢帝に向かって挑んだ。

「私は太史丞です。天文を見て、歴史を予知し、記録し、後世に伝えることを職務とします。近年、歳星（木星）は、漢家の分野（星座の領域）から、魏国の分野に移動しました⁽²⁾。劉氏の祖先が天命を受けたのと同じく、今は曹氏に天命があります」

鼻血を流しながら喚くので、漢帝の顔に許芝の血がかかった。瞬きをして視界を確保しながら、漢帝は言い渡した。

(1) この台詞からの回答は、『献帝伝』を逸脱します。

(2) 『献帝伝』で許芝が言っている。

「朕は同意できない。死罪とする」

宮殿の衛兵が殺到して、許芝を取り押さえた。膝が折れても、

「私の解釈は間違っていない」

と言いつけた。

漢帝が執行を命じると、

「待った」

と言いつつ、兵を率いて走り入る者があつた。

「入殿を許可していない」

漢帝は、逆光のせいで、まだ姿の見えぬ闖入者を叱つた。

「軍役に就いているので、多少のご無礼は許されたい。魏王の曹丕です」

「魏王か」

にわかに漢帝の顔が引きつった。

「許芝は魏臣です。陛下に斬らせる訳にはいかない」

鎧の金属音を鳴らして踏みこみ、曹丕は漢帝のすぐ横に立って、許芝を見下ろした。

華歆は数歩ほど退いて、気まずそうに目を逸らしたままである。

許芝は、魏王さま、と慕うような声を漏らした。

「許芝よ。わが曹氏の天命を、恐れ多くも漢帝に向かって説くこと、ご苦勞であつた。職務に命を賭ける姿勢は、尊敬に値する」

「魏王よ、魏王」

許芝が感涙にむせんだ。

「だが許芝。漢帝を侮辱したことは、魏王である前に、一人の漢臣である私にとって、認でできるものではない。きみを斬る役目は、漢の衛兵でなく、私にある」

言い終わるや否や、居並ぶ者の目にも止まらぬ速さで、曹丕の剣が一閃して、許芝の首が床に転がった。ひと呼吸おいて、許芝の胴体が床に倒れた。

「陛下」

曹丕が剣を収めて、漢帝の前にひれ伏した。

「許芝の無礼、お詫びいたします。むかし周文公は、天下の三分の二を領有しても、なお殷紂王に臣従したので、『論語』にて称賛されました。周公旦は天子の位を得ましたが、兄の子の周成王に位を返上したので、『尚書』で称賛されました。私の徳は太古の偉人には及びませんが、模範としております」

漢帝は、許芝の血をかぶった赤い顔のまま、曹丕を見つめた。

(一) 『三国演義』でも正史でも、許芝は死にません。

(二) 『献帝伝』で、許芝の勸進を辞退したときの曹丕の台詞。以下、同じ。

二人の対面は、ほぼ初めてである。曹丕が魏王の太子となるとき、距離を隔てて朝廷で会っただけだ。だが当時、二人の間には曹操がいた。曹操が存命のとき、漢帝と曹丕は向きあう機会がなく、その必要もなかったのである。

漢帝は、殺気の消えない曹丕に圧迫されて、「そうか」

とだけ答えた。

「私は先王の事業を継承しましたが、恩沢は天下に届きません。魏国の倉庫に貯蔵する食糧や財物を百姓に与えましたが、住居も食物も足りないものが、まだ大勢います。魏国の経営だけを立派に行うことが、私は本望です」

漢帝の表情が、かすかに和らいだ。

——曹操の話を媒介にして、曹丕と心が通じあえそうだ。

と漢帝は感じた。

曹丕は許芝の首をちらりと見てから、

「魏家に天命があると、でたらめなことを言う者がいます。これを聞かされた時に、心は震えて手はおののき、文字を書いても形をなさず、書きたいことを文章にすることもできません。私は詩を作りました。せめて陛下に聞いて頂きたく、本日は参りました」

と釈明した。

「聞きたい」

「はい。喪乱 悠悠として紀を過ぐ。白骨 万里に縦横す。哀哀として下民 靡なびき恃たもむ。吾將に時をたす佐け理を整へんとす。子に明辟を復して致ちしせん……」

戦乱は長引いて十二年を過ぎてしまった。戦死した者の白骨は、各地に散らばっている。万民は悲しんで頼ってきた。私は時局を助けて、統治の道理を整えようと思う。事業が完成したら、地位を返上して引退したいと。

「朕の胸中を、代わりに謳うかのようだ」

漢帝にとって曹操は父のような存在で、強大な保護者でもあった。打ち解けて話せる相手ではなかった。だが曹丕は生まれながらの王であり、年齢が近い。

——魏王と親交を結びたい。

と漢帝は願った。「父」たる曹操を失った哀しみ、君主としての重圧、そして天下の行く末。語りたいたいは無限にある。許芝を斬ったのだから、曹丕は、漢の天命を支持する者であろう。忠臣として信頼できる、と漢帝は判断した。

「良い詩をもらった。お返しがしたい。酒宴をやろう」

「光栄です」

(一) 『三國演義』にない。出典は『献帝伝』。

曹丕は使者を自陣にやり、大量の料理と酒を許都に運ばせた。

十月の壬子（十日）、漢臣と魏臣を区別することなく、許都で酒宴が開かれた。

漢帝と魏王は、初めは主従として隔たって座った。酒が回ると、漢帝が魏王を隣に招いた。曹操の生前には、絶対に見られなかった光景なので、郡臣たちのほうが動揺した。曹丕が寡黙を守ったのと対照的に、漢帝は積極的に話しかけた。

酒宴は終日に及んだ。

料理も酒も出尽くしたところ、魏国の侍中である辛毗、劉曄、散騎常侍の傅巽、衛臻、尚書令の桓階、尚書の陳矯、陳羣、給事中博士・騎都尉の蘇林、董巴らが、曹丕の前に詰めかけた。彼らは漢帝を無視して、曹丕だけを見つめた。

「魏王に申し上げたいことがあります」

彼らの顔色は蒼白で、誰も酒に酔った様子ではない。

「まあ飲め」

曹丕が酒杯を渡そうとすると、桓階が押し戻した。

「魏王は、太子丞の許芝による上書を退けられました。辞退の言葉はとても丁寧で、真心のこもったものと聞いております。しかし——」

曹丕が皿を荒々しく台に置いた。

「許芝の話はしない」

「いいえ、聞いて下さい」桓階が決然と言った。

「漢帝の御前だ」と曹丕が怒ると、

「だからこそ、ここで申し上げるのです」

と食らい付かれた。

集まった魏臣の連中は、悲壮な表情で曹丕を凝視した。衆人の目があるため、さすがに黙殺できず、発言を許した。

桓階は朗々と述べた。

「古代の賢者が天命を受けて、君位を辞退しなかったのは、天命を尊ぶからです。漢家は衰退して、だれも漢帝の詔に従いません。これが実態なのです。先王は中原の戦乱を平定しました。漢家から魏家に天命が移ったことは明白です」

「もう辞めないか」

曹丕は、足を小刻みに揺らした。

桓階は気づかぬふりをして、ますます声を放った。

「魏家への天命は、すでに先王に降っており、いまさら魏王が拒絶できません。魏王は私情に捕らわれず、天下の公義を重んじなさい。どうしても天命を否認されるのなら、魏王

の辞退の言葉もまた、天下に開示すべきです」

桓階が文書を読み終えると、同志とともに地面に額をこすりつけた。宴席の出席者は、一斉に顔を伏せた。曹丕の視線はさまよい、万坐のなかで孤立した。

曹丕はひどく恥じた。自国の臣下が、他の誰でもない漢帝の前で、「誰も漢帝の詔に従わない」と言つて退けた。臣下に対する統制が利いていないと、暴露したに等しい。背中にびっしりと汗をかいた。

「桓階よ」

弱々しく呼ぶが、彼は顔をあげない。

曹丕は、いま言われたこと思い起こした。全てを天下に通達せよと言つてきた。許芝が正しいか、曹丕が正しいか、天下の人々に判断を委ねろという。

——侮辱された。

これが第一の感想である。曹操の生前なら、起こるはずのない事態だった。父に比べて、威信も功績も劣るせいで、臣下にこのような行動を許している。

「分かった」

場を収めるため、受諾するしかなかった。宴席の出席者は、全員が見て見ぬふりをしながら、聞き耳を立てている。曹丕はそれを意識して、正式に回答した。

「四方に通達して私の本心を明らかにせよ。きみたちが言ったことは、私には虚辞にしか思えない。今回、大軍を連れて南下したが、郡県と屯田を視察してみると、百姓の衣食は貧しかった。私は——」

ここで言葉を切り、漢帝の方に身体を向け、

「私は、魏国という一地方の君主としても、実績が足りない。まして皇帝の資格を有するはずがない。不徳を上塗りしたくない。以上である」と締めた。

「その言葉も併せ、開示いたします」

桓階たちは、しずしずと退出した。

活気のあつた酒席は、一転して葬礼のようになった。漢臣と魏臣は、申し合わせたかのように座席を隔離しあい、互いの会話もなくなった。それでも別れ際、漢帝は曹丕の手を握り、ともに天下の秩序を回復させようと言つた。

漢帝の前で恥をかき、面目を失つた曹丕。いかなる手を打つか。次回へ続く。

(一) これも『献帝伝』に準拠。献帝と曹丕が同席する宴席というのが創作なので、発表の場は原典にはない。「天下の公議を急ぐとし、輒ち宣しく外内に令し」が原文。